外国にルーツをもつ子どもの保育に関する研究

研究代表者　和田上　貴昭（日本女子大学）
共同研究者　乙訓　　稔　（武蔵野学院大学）
松田　典子　（文教大学）
渡辺　　治　（渡辺治建築都市設計事務所）
髙橋　久雄　（社会福祉法人至誠学舎立川）
三浦　修子　（至誠第二保育園）
廣瀬　優子　（しせい太陽の子保育園）
長谷川　育代（万願寺保育園）
髙橋　滋孝　（至誠あずま保育園）
髙橋　智宏　（至誠いしだ保育園）
髙橋　　紘　（至誠保育総合研究所）

研究の概要

外国にルーツをもつ子育て家庭に対して保育所で行われている保育や保護者支援の内容および外国にルーツをもつ子どもおよび親に対して保育士がどのような認識をもっているのかについて明らかにすることを目的に調査、分析を行った。

その結果、子どもに対しても親に対しても意思伝達において保育士が戸惑っていることが明らかとなった。一方、うまくいったこととして認識されている事柄としては、意思伝達がうまくいった事例があげられていた。保育士の外国にルーツをもつ子どもの保育およびその親への支援については、さまざまな工夫を通して、伝えることが可能になるよう取り組んでいた。言葉については、わかりやすい表現を用いたり、文字を書いてみせたり、相手の言語を用いたり、写真を用いたりなどである。また相手の文化等について保育士自身が学び、理解し、尊重する姿勢をみせていた。さらに保育の内容についても相手の文化を取り入れたり、他の子どもたちにも理解を促したりと、子どもや親に合わせることに配慮していた。この傾向は外国にルーツをもつ子どもおよび親への対応をより多く経験している保育士に強く見られた。

ただし聞くという姿勢については伝えることよりも保育士の意識が低いとの結果が出た。伝える、または伝わったということを意識する一方、聞くことについて保育士が意識を向けていないため、保育の現場において十分に保護者との相互理解ができていないという課題を示していた

キーワード：外国にルーツをもつ子ども、意思伝達、相互理解、親支援、対話

Ⅰ．研究の動機と研究目的

１．背景

日本における在留外国人（中長期在留者および特別永住者）の数は近年、増加傾向にある。法務省の『在留外国人統計（旧登録外国人統計）』によると、2006年12月に208万人だったその数は、リーマンショックや東日本大震災の影響で一時減少したものの、2016年12月には238万人に増加している。在留外国人者数を国籍・地域別に見ると、中国が71万1,486人と最も多く、全体の28.8％を占めている。以下､韓国45万2,953人（18.3％）、フィリピン25万1,934人（10.2％）、ベトナム23万2,562人（9.4％）、ブラジル18万5,967人（7.5％）の順となっている。このうち、近隣の国・地域である中国、韓国、フィリピン、ベトナムの４か国・地域で在留外国人数全体の66.7％と半数以上を占めている。2006年時点での在留外国人数１万人以上の国に限った場合、2016年と比較して、その増加率が最も高かったのはベトナムで、2006年の時点では３万２千人ほどだったその数は、2016年にはほぼ20万人となり、約６倍になっている。他にもインドネシアやインド、中国、フィリピン、タイは1.2倍を超す増加となっている。

外国にルーツを持つ子どもや子育て家庭の数も増加している。図表１は2012年以降の在留外国人の数と幼児

（０～５歳とした）の数の推移である。日本での就労にあたって子どもを連れてくることや、日本において出産するなどが考えられるが、在留外国人における子どもの数は大人の数以上に増加傾向にあることが分かる。また、ここに示されている数は外国籍の子どもの数であり、例えば日本人と結婚した元外国籍の方の子どもが日本国籍である場合には、この数に含まれない。

日本保育協会が全国の自治体を対象に行った調査[1]によると、2008年８月時点で外国人児童が入所している保育所は、22都道府県（46.8％）、９政令指定都市（52.9％）、19中核市（47.8％）で計50自治体（48.5％）であった。保育所に入所している外国人児童数は、13,337人である。また、この調査において保育所が親とのコミュニケーションで困難を抱えていると同時に、親も日本語ができないことでの課題を抱えているとの結果が示されている。

２．外国にルーツをもつ子どもの保育

異国である日本における生活や子育ては習慣や文化、宗教の違いなどから困難を伴うことも多く、支援が必要な方々も多く存在する。濱村らの調査[2]によると、育児で困っていることについては「日本語で意思疎通ができない」、「習慣・文化の違い」、「相談相手がいない」、「父親とも意思疎通ができない」といった回答を得ている。また日本で生活するフィリピン人の母親は、育児ストレスに対してあきらめたり我慢したりすることで対処しているとの結果がでている。菅田[3]はエスノグラフィ的手法により、外国にルーツをもつ子どもが保育所に適応していく過程とそれに伴う親の葛藤について丁寧に分析している。この研究の調査対象となった母親は保育士とは、子どもの認識が異なり、また子どもに対する期待も異なっている。こうした「ズレ」は母親が保育所のやり方に従うという形が取られていたために表面化していないが、その背景には母親と保育士の対話不足が指摘されている。言葉の問題もあるが、文化の違い等から生じる認識の差を埋めるためには対話が必要となる。「保育士と外国籍保護者の共通認識をどのように広げていくかということが、外国籍幼児の保育における課題である」[4]としている。そしてそのための取り組みとしては「対話」が必要であるとしている。

３．研究目的

外国にルーツをもつ子ども子育て家庭に対して、地域において子育て支援の拠点となるべき保育所が果たすことができる役割は大きい。一方で外国にルーツをもつ子どもの保育現場における家庭支援の取り組みについての研究は少ない。こうしたことから、外国にルーツを持つ子育て家庭への保育所による支援について、本研究では保育所で行われている保育や保護者支援において「戸惑ったこと」や「うまくいったこと」の事例を分析することで、どのような取り組みが行われているのかを明らかにすると共に、外国にルーツをもつ子どもおよび親に対して保育士がどのような認識をもっているのかについて明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．研究方法

１．データ収集方法

東京都内にある２自治体で運営されている保育所（Ａ自治体２か所、Ｂ自治体４か所）にご協力いただき、これらの保育所で勤務する保育士を対象に留置式によるアンケート調査を実施した。調査対象としたＡ自治体は調査時において全人口に占める外国籍の割合が比較的高く（10％以上）、Ｂ自治体は比較的低い（2％未満）。

主な調査項目は、保育士の基本的属性（性別、年齢、保育所での勤務経験年数）、外国にルーツをもつ子どもおよびその親への対応経験の有無とその内容、外国にルーツをもつ子どもの保育および保護者支援に関する考えである。

調査時期は2017年10月である。調査にあたっては事前に保育所に説明に伺い、各保育士に記入してもらい、保育所ごとに記述済みのアンケート用紙を研究代表者宛に送付していただいた。その結果、90名の保育士から回答を得た。

図表1：在留外国人の全体数と幼児の人数の増加率

	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年
全体 （割合）	2,033,656 (100.0)	2,066,445 (101.6)	2,121,831 (104.3)	2,232,189 (109.8)	2,382,822 (117.2)
０～５歳 （割合）	79,626 (100.0)	81,490 (102.3)	85,206 (107.0)	90,152 (113.2)	98,520 (123.7)

＊　カッコ内は2012年を100とした時の割合
＊　人数は12月末時点におけるもの

２．回答者である保育士の基本的属性等

回答者である保育士の属性は下記の通りである。

性別は女性81名（90.0%）、男性９名（10.0%）であった。年齢は20代が37名（41.1%）、30代が28名（31.1%）、40代が14名（15.6%）、50代以上が11名（12.2%）であった。保育所の勤続年数（他の保育所での経験も含む）は５年以下が33名（36.7%）、６年以上10年以下が25名（27.8%）、11年以上15年以下が16名（17.8%）、16年以上20年以下が９名（10.0%）、21年以上が７名（7.8%）であった。A自治体にある保育所の保育士が33名（36.7%）、B自治体にある保育所の保育士が57名（63.3%）であった。

保育所を利用していた外国にルーツをもつ子どもの親の出身国・地域について５名以上があげたものは、中国59名、韓国朝鮮30名、アメリカ15名、フィリピン10名、イギリス８名、ドイツ８名、ミャンマー７名、オーストラリア５名、ブラジル５名、ベトナム５名であった。中には「南米」などの地域や不明との記載もあった。A自治体にある保育所の保育士がすべて外国にルーツをもつ子どもの保育にかかわった経験があるのに対して、B自治体にある保育所の保育士は「ある」が43名（75.4%）、「ない」が12名（21.1%）、「わからない」が２名(3.5%)、であった。

３．分析方法

外国にルーツをもつ子どもおよびその親への対応経験の内容に関する記述については、記述内容について１記述ごとにカード化し、KJ法を援用して分類を行った。また、記述で用いられている用語について形態素分析を行い「名詞」、「サ変名詞」、「動詞」を抽出した。形態素分析等テキスト分析についてはKH Coder[5]を用いた。

外国にルーツをもつ子どもの保育および保護者支援に関する考えについては、SCT法（Sentence Completion Test）により回答していただいた。SCT法は文章完成法ともいわれ、「決まった書き出しに続く文を自身の連想によって記入し、文章を完成してもらう方法」[6]であり、語幹と呼ばれる刺激となる語句（決まった書き出し）に続く文章を連想して完成させるという半構造化された投影法である。多様な語幹を用いて多角的に同一テーマについて問うタイプの方法と、同じ語幹を複数回提示して回答者内の多様性を問うタイプの方法に分けられる[7]が、本研究においては、外国にルーツをもつ子どもと親への保育士のかかわりについて、どのように捉えているか、その多様性について検討することを目的としているため、限定的な語幹を準備した。記述については、記述内容について１記述ごとにカード化し、KJ法を援用して分類を行った。

４．倫理的配慮

アンケートの回答においては、記入によって得られた個人情報を本研究以外で用いないこと、データの入力および集計、分析において所属する保育所の関係者（園長や法人関係者など）が関与しないこと、調査終了後にデータを破棄することについて文書で説明するとともに、分析において記述内容から個人が特定されないよう配慮した。

Ⅲ．結果

１．外国にルーツをもつ子どもおよびその親への対応経験の有無とその内容

（１）外国にルーツをもつ子どもの保育において、戸惑ったこと

「外国にルーツをもつ子どもの保育において、戸惑ったこと」の有無について聞いたところ、44名が「ある」と回答した。「戸惑ったこと」について１つ例を挙げてもらったところ、事例にあげられた子どもの年齢に関しては、３歳未満児が21名、３歳以上児が20名、未記入が５名であった。親の国籍については、両親ともに外国籍が24名、母が外国籍が６名、父が外国籍が14名であった。内容についてカテゴリーに分けたところ、【言葉、意思疎通】(28)、【宗教、習慣】（９）、【食事】（７）、【養育方法】（３）、【子どもの情緒面】（１）となった（カッコ内は度数、複数の要素が含まれる回答があったため、合計は回答数と異なる）。

【言葉、意思疎通】の記述例としては、「ちょうど会話が活発になってくる時期の来日で、お子さんが緘黙になり、コミュニケーションが全くとれなかった。うなづいてもくれない状況」や「言語の違い。集まり等で絵本を読んだりしても内容が伝わりにくく、集中できないことがあった。」などがあった。

形態素分析による「名詞」の出現数で多かったのは「言葉」20件、「日本語」16件であり、「サ変名詞」では「理解」10件、「会話」７件であり、「動詞」では「伝わる」11件、「伝える」10件、「食べる」８件であった。子どもとのコミュニケーションにおいて多くの保育士が戸惑いを感じていた。なお、【言葉、意思疎通】に分類された回答について年齢別にすると３歳未満児が12、3歳以上児が14、不明が２であった。

【宗教、習慣】の記述例としては、「自分の国の保育園でのあたりまえを日本でもしてしまう。(例：保育中の子どもの写真をとってしまったりする。)」、「自分の思ったことをストレートに相手に伝える。伝え方が強めで言葉も少し乱暴。母に伝えたところ、外国のアニメを見ていることが多く、アメリカではジョークとしてとらえられるが、日本の子どもには少し刺激が強いようだ。」などがあった。宗教については【食事】と重なることが多く、記述例として「お父さんの国の宗教上、豚肉を食べられずアレルギー児と同様、豚肉の出るメニューのときは他のものを提供し大変なことがある。」などがあった。

また「ミルク、離乳食がおうちと園とのものが全く異なり、子どもがなかなか食べず。おうちとすり合わせていくのが大変だった。」など、食べ慣れていないものを園で提供する際に戸惑いを感じるとの記述が見られた。

（2）外国にルーツをもつ子どもの保護者への対応において、戸惑ったこと

「外国にルーツをもつ子どもの保護者への対応において、戸惑ったこと」の有無について聞いたところ、45名が「ある」と回答した。「戸惑ったこと」について１つ例を挙げてもらったところ、子どもの年齢に関しては、３歳未満児が20名、３歳以上児が22名、未記入が５名であった。親の国籍については、両親ともに外国籍が19名、母が外国籍が19名、父が外国籍が８名、無記入が１名であった。内容についてカテゴリーに分けたところ、【言葉、意思疎通】(42)、【宗教、習慣】（４）となった。

【言葉、意思疎通】の記述例としては、「父に、母への伝達（普段の申し送りや行事などのお知らせ）をお願いしてもうまく伝わらず、職員が直接母に伝えるとしても言語の壁が、」や「病名が通じない」などがあった。両親ともに外国にルーツをもつか、母親が外国にルーツをもつ場合に戸惑うことが多かった。【宗教、習慣】の記述例としては、「文化の違い。すぐもんく言ってくる。考え方の違い。」や「(日常会話）日本語は通じるが文章（プリント、掲示物）が理解できない。生活習慣の違い。」といった回答が見られた。

形態素分析による「名詞」の出現数で多かったのは「言葉」13件、「日本語」11件であり、「サ変名詞」では「理解」９件、「連絡」４件であった。数は少ないが「お伝え」、「会話」、「伝達」、「説明」がそれぞれ３件あった。「動詞」については、「伝わる」21件、「伝える」19件、「通じる」８件であった。外国にルーツをもつ親に対して何かを伝えようとする際に保育士が戸惑っている様子がうかがえる。「伝える」について「KWICコンコーダンス」を用いて前後の用語を確認したところ、「連絡事項が伝わらない」や「登降園時にお伝えしたいことが言葉ではなかなか伝わらない」、「日常使っている言葉で会話すると伝わらなかった」、「日中の様子や伝達を伝えるのが難しかった」などの表現が用いられていた。

（3）外国にルーツをもつ子どもの保育において、工夫した点

「外国にルーツをもつ子どもの保育において、工夫した点」のうち、「うまくいった」事柄について１つ例を挙げてもらったところ、34名が「ある」と回答した。そのうち、子どもの年齢に関しては、３歳未満児が13名、３歳以上児が21名であった。親の国籍については、両親ともに外国籍が18名、母が外国籍が７名、父が外国籍が９名であった。内容についてカテゴリーに分けたところ、【子どもへの働きかけ】(25)、【親への働きかけ】（５）、【園児同士の関係】（４）、【その他】（４）となった。

形態素分析による「名詞」の出現数で多かったのは「子ども」12件、「言葉」７件、「日本語」７件であり、「サ変名詞」では「理解」５件、「会話」４件、「動詞」は「伝える」13件、「使う」10件、「話す」10件であった。このうち、「言葉」について「KWICコンコーダンス」を用いて前後の用語を確認したところ、「一生懸命言葉をかけてあげる姿」や「かんたんな言葉で伝える」など、意思伝達が困難な子どもに対して「言葉」を工夫している様子がうかがえる。「日本語」についても同様の記述が見られた。また、「理解」については、「本児の姿をよく理解し、本児との信頼関係を築く」や「あなたの気持ちを理解してあげたいんだという姿勢」など、子どもとの関係構築を意識している様子がうかがえた。

【子どもへの働きかけ】の記述例としては、「笑顔で毎日声かけし、行動の変わり目には、手をつないで過ごしていく中、少しずつ心を開いてくれ、笑顔やうなづきを返してくれるようになった。今も交流する機会があり、笑顔で話しかけてくれるくらいいい関係が続いている。」や「韓国語での対応をした。(普段から)」、「時間がかかってもあなたの気持ちを理解してあげたいんだという姿勢を持ち続けた。また伝えやすい様、感情の絵カード、イラストなどを用いてやり取りした。」などがあった。【親への働きかけ】の記述例としては、「外国ならではの決まり事（食事のマナーなど）もしっかり認め、日本での決まり事があることも伝えると、自分で分けて使うことができるようになった。その際は、家庭との連携も大切だと考えている。」や「連絡事項は個別に。その保護者その国の料理を教えてもらう機会を作り、保護者のつながりができるようにした。職員とも仲良くなれるように。」といった回答が見られた。【園児同士の関係】の記述例としては、「あまりうまく使えないことを伝え、困っていたら助けてあげてほしいと伝えると、いろんな子どもたちが、手伝いをしてくれたり、一生懸命言葉をかけてあげる姿が見られ、友達ができて、本児も安心した様子を見せていた。」や「子どもの集団で積極的に友達へかかわる姿があったことで日本語の習得もはやかった」といった回答が見られた。

（4）外国にルーツをもつ子どもの保護者への対応において、うまくいったこと

「外国にルーツをもつ子どもの保護者への対応において、うまくいったこと」について１つ例を挙げてもらったところ、30名が「ある」と回答した。そのうち、子どもの年齢に関しては、３歳未満児が14名、３歳以上児が14名、未記入が１名であった。親の国籍については、両親ともに外国籍が13名、母が外国籍が11名、父が外国籍が５名、未記入が１名であった。内容についてカテゴリーに分けたところ、【保護者への伝え方】(26)、【その他】（４）となった。

形態素分析による「名詞」の出現数で多かったのは「言葉」７件、「日本語」６件、「母親」４件、「様子」４件であり、「サ変名詞」では数は少ないが「会話」、「説明」、「連絡」がそれぞれ３件、「やり取り」、「成長」、「対応」、「伝達」、「保護」、「話」がそれぞれ２件あった。また「形容動詞」には「簡単」が５件あった。「動詞」は「伝える」13件、「話す」４件であった。「様子」、「会話」、「やり取り」、「成長」、「簡単」について「KWICコンコーダンス」を用いて前後の用語を確認したところ、「登降園時に家庭での様子を聞いたり、園での様子を伝えることで、コミュニケーションをとることができた」、「単語とジェスチャーを交えて会話した」、「園と家庭が共に成長を喜び合うことができた。それと同時に子ども自身みるみる成長が促されたように感じた。」、「できるだけ簡単な日本語で伝える」などの表現が用いられていた。外国にルーツをもつ親に対して、子どもの成長を共通の目的として保護者とコミュニケーションをとることで、親に対しても子どもに対しても良い結果が得られたと認識している様子がうかがえる。

【保護者への伝え方】の記述例としては、「伝達の時にはジェスチャーや絵を使って説明した。また、簡単な文などは調べてその保護者の言語で伝えるようにした。お知らせ等もイラストを使って配ったりした。」や「連絡帳を事前に書いておいた。また、前もって伝えておいた。」などがあった。【その他】の記述例としては、「役所からの支援がある家庭だったので、役所から紹介してもらった通訳の方と連携し、必要事項を伝えてもらった。」などの回答が見られた。

２．外国にルーツをもつ子どもの保育および親への対応に関する考え

（１）子どもに対して保育士はどのような関わりが必要と考えているか

保育所で担当する子どもが外国にルーツを持つ場合に、子どもに対して保育士はどのような関わりをする必要があると思うかについて、「子どもが外国にルーツを持つ場合、」という書き出し（語幹）の文章を完成させる形の質問に回答をしてもらった。同じ語幹を４つ用意し、「経験のない方も直感でご記入ください。思いつく範囲で結構です。４つ全部を埋める必要はありません」とし記述してもらった。

回答数別に見ると、未記入が３名（3.3%）、１つ記入が34名（37.8%）、２つ記入が38名（42.2%）、３つ記入が12名（13.3%）、４つ記入が３名（3.3%）であった。

形態素分析による「名詞」の出現数で多かったのは「文化」36件、「言葉」29件、「子ども」21件であり、「サ変名詞」では「理解」23件、「配慮」21件、「保育」21件で、「動詞」は「思う」23件、「伝える」16件、「知る」15件であった。このうち、「文化」について前後の用語を確認したところ、「その国の文化について知る」や「外国の文化を他の子どもたちに伝える」など、外国にルーツをもつ子どもに対して適切な保育を行うためにその文化を学び、尊重する姿勢と、外国の文化を他の子どもにも伝え様とする姿勢がうかがえる。「言葉」については、「簡単な言葉を心がける」や「その国の簡単な言葉などを勉強しておくことが大事だと思う」など、子どもに対する意思伝達において言葉を重視している様子がうかがえる。

さらにKJ法を援用し、動詞に着目して内容を分類したところ、【学ぶ・尊重する】(42)、【伝える】(30)、【他児とつなぐ】(24)、【同じように接する】(23)、【受け入れる】(22)、【かかわる】(15)、【家庭と協力する】（６）の７つのカテゴリーに分けられた（カッコ内は該当数。５つ以上の同様の内容のものだけをカテゴリーとした。記入内容に複数の意味が含まれていることがあったため、合計が回答数とは一致しない）。

【学ぶ・尊重する】の記述例としては、「受け入れる前からその国特有さ（育児へのやり方、習慣の違い等）を園も学ぶ必要がある。」や、「なれない環境や文化の違いなどの中で子どもの今の心情を読み取り、寄り添ってあげる。」、「食文化が違う可能性がある為、必要な場合は食事の対応を行う必要があると感じます。」といった回答が見られた。子どもの親がもつ文化や習慣、宗教等について保育士が学ぶと共に、それを踏まえて保育を展開することが必要であるとの考えが多く示されていた。特に食事に関しては保護者の関心が高いようで、アレルギー児と同等の対応をしている様子が見受けられた。

【伝える】の記述例としては、「言葉でのやり取りをていねいに行う。」や、「絵を描いて説明する」、「母国との文化の違いも頭に入れながら日本の文化を伝えていく」といった回答が見られた。子どもを理解する手段としてコミュニケーションを重要視しているとともに、他の子どもたち同様に日本の文化を教えることにも配慮している様子がうかがえる記述が多く見られた。なお「伝える」の16件に対して「聞く」を用いた記述は２件であった。このことは、保育士がどのようにしたら伝わるかについての関心は高く、子どもの思いや考えを「聞く」ことについては関心が向けられていない状況を示している可能性がある。

【他児とつなぐ】の記述例としては、「他児との関わりが深まるよう援助する。」や、「その事が原因で差別されたりしないように子ども同士の関わりを見守り、間に入ったりする。」、「クラスの子ども達には世界の国々肌の色の異いの人々が沢山いることを知ってもらう。」といった回答が見られた。他の子どもたちとの関わりの中で、その子自身が成長することを目指すと共に、周りの子どもたちも違いを尊重できる心が育つような保育をしたいといった思いが表れていると考えられる。

【同じように接する】の記述例としては、「外国人だから違うかかわり方をするというのではなく、ほかの子ど

もたちと同じように接している。」や、「特に“外国人だから”と特別なことをする必要はないと思う。日本人でも外国人でも宗教やコミュニケーションの方法などに配慮が必要な場合は個別に対応する必要があると思うので。」、「周りの児童と変わらずに接しながらも、様子の変化など注意深く見守っていく。」といった回答が見られた。特別扱いをするのではなく、配慮をしながらも外国にルーツをもつということをその子どもの個性として捉えるといった見方が記述からうかがえる。一方で、このカテゴリーには分類しなかったが、少数意見として「お子様に合った保育施設に行くべき。」といった記述が見られた。保育所でできる対応には限界があるため、子どものためにも適切な保育が提供される場を選ぶ方がよいという考えであろう。

【受け入れる】の記述例としては、「ひとまず誰もわからない中来ていたりするのでとにかく安心できるように受け止める。」や、「宗教など信仰しているものがあればそれにそうようにする（ベジタリアンなど）」といった回答が見られた。違いや違いによる不安な気持ちなどを受容する姿勢が示されている。

【かかわる】の記述例としては、「環境の変化による、精神的不安を取り除くためにもスキンシップを多くとり配慮していく。」や、「言語の違いに不安になることが大きく、コミュニケーションが取れるようになるまでの時間がかかることもあるので、安心して過ごせる環境を整えてあげること。」といった回答が見られた。配慮した保育環境の提供が必要であるとの意見が示されていた。

【家庭と協力する】の記述例としては、「家庭との連携を取ったり、協力を得ながら関わり、対応していく。」や、「保護者の方と良く話をし、お子様にあった援助が出来るように心掛ける。」といった回答が見られた。他の子どもも同様であるが、保育における親との協働が不可欠であることが示されている。

（2）親に対して保育者はどのような関わりが必要と考えているか

保育所で担当する子どもの親が外国にルーツを持つ場合に、子どもに対して保育者はどのような関わりをする必要があると思うかについて、「保護者が外国にルーツを持つ場合、」という書き出し（語幹）の文章を完成させる形の質問に回答をしてもらった。同じ語幹を４つ用意し、「経験のない方も直感でご記入ください。思いつく範囲で結構です。４つ全部を埋める必要はありません」とし記述してもらった。

回答数別に見ると、未記入が10名（11.1%）、１つ記入が41名（45.6%）、２つ記入が27名（30.0%）、３つ記入が９名（10.0%）、４つ記入が３名（3.3%）であった。

形態素分析による「名詞」の出現数で多かったのは「言葉」34件、「文化」28件、「コミュニケーション」20件であり、「サ変名詞」では「対応」20件、「保護」19件、「理解」10件で、「動詞」は「伝える」30件、「思う」14件であった。このうち、「言葉」について前後の用語を確認したところ、「日本語が話せない子ども保護者の場合、言葉も伝わらず、不安なことが多いと思う」や「簡単な言葉で明確に伝える」など、言葉で意思疎通することができない親の状況や、こうした親に対して伝達方法を工夫している保育士の姿ががうかがえる。「文化」については、「その国の文化、宗教、慣習など、尊重した関りを持つことが大切だと考えます」や「こちらの一方的な文化を押し付けるのでなく、相手の文化を受け入れつつ、各園の保育に合わせた対応を行う」など、親の国の文化を尊重しつつ、日本での保育を理解してもらいたいと考えている様子がうかがえる。

さらにKJ法を援用し、動詞に着目して内容を分類したところ、【合わせる】(54)、【伝える】(47)、【学ぶ・尊重する】(31)、【かかわる】(18)、【関係を築く】（９）の５つのカテゴリーに分けられた（カッコ内は該当数。５つ以上の同様の内容のものだけをカテゴリーとした。記入内容に複数の意味が含まれていることがあったため、合計が回答数とは一致しない）。

【合わせる】の記述例としては、「コミュニケーション能力がどれくらいあるのかを見ながら、よく話をすることが大切。」や、「その方の持っている条件に合わせる。行事（クリスマス、おまつりを外国の方はいやがることがあった）」といった回答が見られた。コミュニケーションの方法や相手の文化、習慣、宗教に対して配慮する必要があるとの内容が多く見られた。

【伝える】の記述例としては、「“言葉”の壁が少なからずあるので、分かりやすい表現や言葉で伝えていく必要がある。」といった回答が見られた。「言葉の壁」については、３名の回答者の記述に見られたが、親に日々の保育の様子を伝える役割を持つ保育士にとっては、大きな「壁」となっている様子がうかがえる。対応として「わかる（わかりやすい）」（９）、「丁寧（ていねい）」（８）、「個別」（６）、「ゆっくり」（４）（カッコ内は出現数）などの表現が「壁」を乗り越える手段として用いられている様子がうかがえる。「子どもが外国にルーツを持つ場合、」の文章完成法における回答でも同様であったが、この質問においても「伝える」(30) に対して「聞く」（４）であり、伝えることの方が聞くことよりも関心が高いことが示された。

【学ぶ・尊重する】の記述例としては、「その国がどのような国なのかを把握しておくことが大切。」や、「その国の文化、生活習慣、教育観など知ることも大切。」といった回答が見られた。あたりまえと保育士が認識していることが外国ではあたりまえではないことがあるため、親のルーツとなる国の文化等について学び、尊重することは重要なことと認識されている。

【かかわる】の記述例としては、「保護者にどのように接したら良いか、子ども達にどのように伝えていくかを

聞ける位のコミュニケーションをとる。」や、「積極的に声をかける。」といった回答が見られた。次に挙げている【関係を築く】にもつながる行為であるが、相手を知り、かかわり、関係を築くことは外国にルーツをもつ親に対してだけでなく、他の保護者に対しても同様であると考えられている。

【関係を築く】の記述例としては、「お互いの理解を深め、信頼関係を築けるよう心掛ける。」や、「特に細部にわたって良くなった面、成長した面を共感しあえるようにする。」といった回答が見られた。言葉の問題もあり、関係を築くことは困難である場合が多いようであるが、この点についても他の保護者に対するのと同様であると考えられている。

（３）保育所による違い

保育所所在地別にすると（１）の「子どもが外国にルーツを持つ場合、」という書き出しについては、Ａ自治体にある保育所保育士の記入は、未記入が１名（3.0%）、１つ記入が17名（51.5%）、２つ記入が13名（39.4%）、３つ記入が２名（6.1%）、４つ記入が０名であった。一人あたりの平均記述数は1.48で、１つの記述に対する文字数は37.0文字であった。Ｂ自治体にある保育所保育士の記入は、未記入が２名（3.5%）、１つ記入が17名（29.8%）、２つ記入が25名（43.9%）、３つ記入が10名（17.5%）、４つ記入が３名（5.3%）であった。一人あたりの平均記述数は1.91で、１つの記述に対する文字数は29.9文字であった。Ａ自治体の方が記述数が少ないものの、具体的な記述が多かったことが文字数に表れていると考えられる。

また、回答者数を考慮した上で、Ａ自治体にある保育所の保育士の方が多かった記述内容は、【受け入れる】（22回答中13）である。一方Ｂ自治体にある保育所の保育士の方が多かった記述内容は、【学ぶ・尊重する】（42回答中34）である。Ａ自治体の方が外国にルーツをもつ子どもたちの受け入れ経験が多いため、外国を知った上でどのように保育を行うかということに意識が向いていて、Ｂ自治体の方は、経験が少ないため、まず外国の文化を知ることに意識が向いていることが要因であると考えられる。形態素分析による出現数においても、Ｂ自治体において「理解」が20あるのに対し、Ａは自治体は３で、「受け入れる」についてはＡ自治体が「６」、Ｂ自治体が「３」であることにも表れている。

（２）の「保護者が外国にルーツを持つ場合、」という書き出しについては、Ａ自治体にある保育所保育士の記入は、未記入が５名（15.2%）、１つ記入が18名（54.5%）、２つ記入が７名（21.2%）、３つ記入が３名（9.1%）、４つ記入が０名であった。平均記述数は1.24で、１つの記述に対する文字数は36.0文字であった。Ｂ自治体にある保育所保育士の記入は、未記入が５名（8.8%）、１つ記入が23名（40.4%）、２つ記入が20名（35.1%）、３つ記入が６名（10.5%）、４つ記入が３名（5.3%）であった。一人あたりの平均記述数は1.63で、１つの記述に対する文字数は29.0文字であった。

また、回答者数を考慮した上で、Ａ自治体にある保育所の保育士の方が多かった記述内容は、【伝える】（47回答中22）である。Ａ自治体の方が経験が多い分、保護者に伝えることの重要性を認識していると考えられる。具体的な記述内容についても、Ｂ自治体の方が「ゆっくり」、「ていねいに」などが記述されているのに対して、Ａ自治体は、「英語で話したり、スマホなどの機器をつかって」、「身ぶり、手ぶり、絵などを活用し」、「写真表記を増やす」、「ふりがなをふってあげたり、ひらがなで書く」など、具体的な方法を記している。

Ⅳ．考察

今回の研究において、外国にルーツをもつ子どもおよび親への対応において保育士は、伝えることに苦労している様子がうかがえた。言葉が異なることもその要因であるが、それ以外にもルーツとなる国の文化や習慣、宗教に影響を受けた生活スタイルや対人関係等が影響していた。子育ては、その国や民族の文化や伝統を伝える行為を含むため、保育現場では両者の違いが表面化することは当然である。

こうした違いに対して保育士はさまざまな工夫を通して、伝えることが可能になるよう取り組んでいた。言葉については、わかりやすい表現を用いたり、文字を書いてみせたり、相手の言語を用いたり、写真を用いたりなどである。また相手の文化等について保育士自身が学び、理解し、尊重する姿勢をみせていた。さらに保育の内容についても相手の文化を取り入れたり、子どもたちにも理解を促したりと、子どもや親に合わせることに配慮していた。この傾向は外国にルーツをもつ子どもおよび親への対応をより多く経験している保育士に多く見られた。その上で日本の保育についての理解を求めている。

菅田が「日本の保育所で外国籍幼児が過ごすために必要である日本語や行為の習得のみに目を向けるのではなく、母語や母国文化への関心を高めるようなはたらきかけについて、保育士と外国籍保護者は対話していかなければならない」[8]と記述しているように、コミュニケーションは対話、つまり双方向でなければならない。相手を理解し尊重していくためには相手の意見を聞くことは必要である。今回の調査においても「聞く」という姿勢については「伝える」ことよりも意識が低いとの結果が出ている点については、保育の現場において十分に保護者との相互理解ができていないという課題を示したものと言えよう。

ただし今回の調査は対象となる保育所が限られている上に保育士の数も少ない。保育所ごとに保育や親への対応に関する考えは統一されていることを考えると、調査

結果が偏っている可能性は否めない。さらに調査対象を広げて意見を集めることによって、現在の保育所がどのように外国にルーツをもつ子どもの保育を行っているのか、その親に対してどのように支援しているのかを明らかにする必要があると考えられる。

1）日本保育協会（2008）『保育の国際化に関する調査研究』p.4

2）濱村美和子、狩野鈴子、三島みどり、永島美香（2004）「在日外国人の育児の現状について（第1報）：在日フィリピン人の母親の育児ストレスとその対処法」『島根県立看護短期大学紀要』10, 45-52

3）菅田貴子（2006）「外国籍幼児の保育所への適応過程に関する研究」『保育学研究』44（2），200-209

4）菅田　前掲 p.112

5）樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版

6）菅野幸恵（2008）「「かんがるぅプロジェクト」—その概要と時代背景」岡本依子，菅野幸恵編『親と子の発達心理学：縦断研究法のエッセンス』新曜社，86-94　p.87

7）一般社団法人全国保育士養成協議会（2015）『平成26年度　専門委員会課題報告書　学生の自己成長感を保障する保育実習指導のあり方　—保育実習指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを中心に—』p.155

8）菅田　前掲 p.112